

# 長徳寺址発掘調査報告書



昭和 52 年 11 月 3 日

高知県長岡郡本山町教育委員会

# 長徳寺跡の発掘に寄せて

昭和50年からとりかかっております本山町史編さんにつきましては関係者のあたたかい御協力と御努力により、予定のとおり順調に進んでおりますが「中世土佐における吾倫荘の成立と長徳寺の変遷の記録」は本誌編さんにとって欠かすことのできない貴重な資料であると思われます。

中でも吾倫荘につきましては土佐における荘園志料等の文献によりまして、その移り変りをうかがい知ることもできますが、ただ長徳寺の起源につきましては当時の領主八木氏の祖先により造立され云々であることから建立の歴史は明らかにされておりますが最も重要な寺院の規模や配置・退転の記述等は無く全く解明されないままになっておりました。

ところで、このたびの町史編さんを機会に、考古学・歴史学の権威者である高知女子大学岡本健児教授、高知県立高知追手前高等学校前田和男教諭の両先生に御無理なお願いを致しまして2回にわたり発掘調査を行いましたところ長徳寺の跡から西日本では、おそらく初めてであろうといわれる多宝塔の礎石の下に敷かれる根石群が整った形で確認され往時の堂塔伽藍の配置の全容が明らかにされ、われわれが想像した以上に大きな寺院であったことが証明されました。また同じ場所から長徳寺建立以前の縄文、弥生時代の遺物が多数出土されておりまして、この台地を中心として古く縄文時代の早期から私達の祖先が既に住んでいたことが確認されました。

このことは本町にとりまして、まさに画期的な文化上の成果であり将来の教育、文化、或は社会全体について考えてみましても歴史的な意義は、まことに大きく更に佛教、考古学的な資料として今後の研究に役立つことを確信し後世に残したいものだと考えております。第1次、第2次の発掘調査を通じて指導いただきました岡本先生、前田先生の御労苦に感謝致しますとともに、心よく発掘を許していただきました土地所有者の方や、町の内外をとわず御協力下さった皆様方に心から御礼を申し上げます。

本山町教育委員会

教育長 山 下 定 男

## 目 次

長徳寺跡の発掘	岡本健児・前田和男・岡本桂典・井本葉子	1
付録 1		
上奈路・嶺北高校校庭出土の遺物群	岡本健児・前田和男	26
	岡本桂典・井本葉子	
付録 2		
嶺北地方発見の銅矛	岡本健児	35

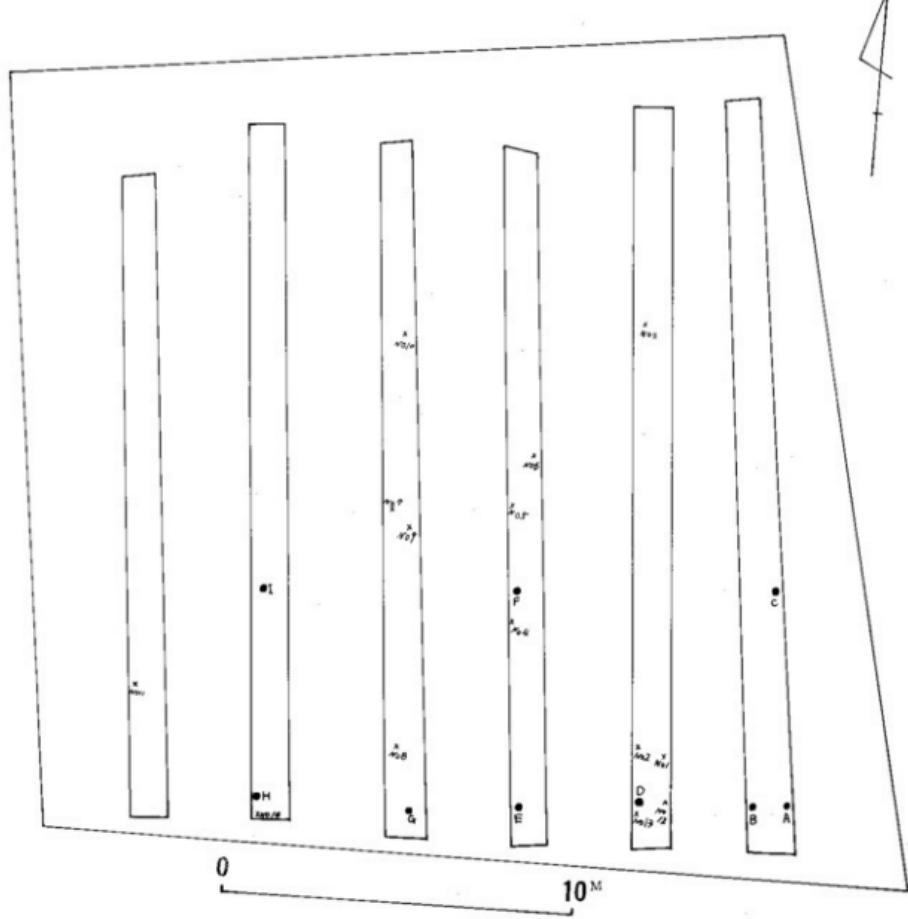
# 長徳寺址の発掘

岡本健児・前田和男  
岡本桂典・井本葉子



第1図 長徳寺址の位置（×印）

長徳寺址は高知県本山町寺家にある。現在は長徳寺はなくなっているが、長徳寺の鎮守であった若一王子宮は大きな拝殿・本殿を残し、古への面影を残している。ここに本山町教育委員会を発掘責任者として、長徳寺の発掘を実施した。これはその記録である。なおこの発掘は、純然たる学術発掘である。



第2図 A 地区の発掘図

第一次の発掘は、昭和51年4月15日、16日の2日間にわたって実施し、発掘担当者として岡本健児・前田和男がこれに当った。

第一次発掘は第26図のA地区、河岸段丘上の緩傾斜地である桑畑を発掘した。その結果深さ40cmのところから、礎石の根石が南北約6M・東西約15M四方に囲にみるがようにならんがように発見された。第2図のA～Iの黒丸は、根石群のあったところで、これによって横長い建造物があったと考えられる。



第3図 A地区全景

第3図にみる桑畠  
が第一次発掘区のA  
地区、その向う側で  
人影のない畠がB地  
区で第二次発掘を行  
ったところである。  
吾橋山長徳寺は久安  
5（1149）年、本山  
の領主たる八木頼則・  
盛政父子によって建  
立、鎌倉時代土佐に  
おける古寺の一つと  
して栄えた。寺は二  
度の火災にあって、  
室町時代まで細々と  
続いたことが文献史  
学の面で判明してい  
る。火災にあったこ  
とは、第一次・第二  
次両度の発掘で実証  
することができた。



1



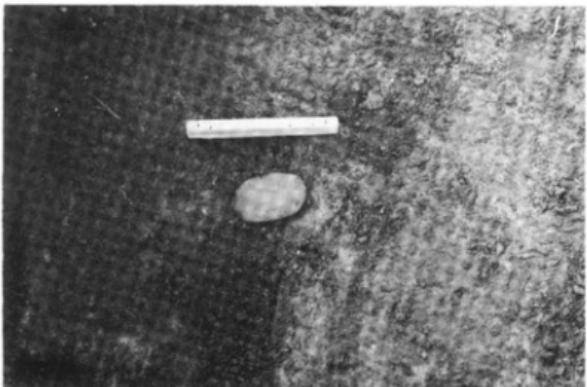
2

第4図 A地区出土の礎石下の根石

根石群はこの付近にある自然石（綿雲母片岩など）を使用している。第4図の1は小さい礎石を用いたもの、第4図の2は大きい川原の石を利用したものである。これらの根石の上の礎石は、村人に取り去られ墓石とか、人家の階段などに現在利用されている。しかしこの根石の存在から、ここに灌頂堂があったのではないかということが判明した。根石群の周辺からは、平安末～鎌倉時代の須恵器片、瓦器、室町時代の土師質器片が出土している。



1

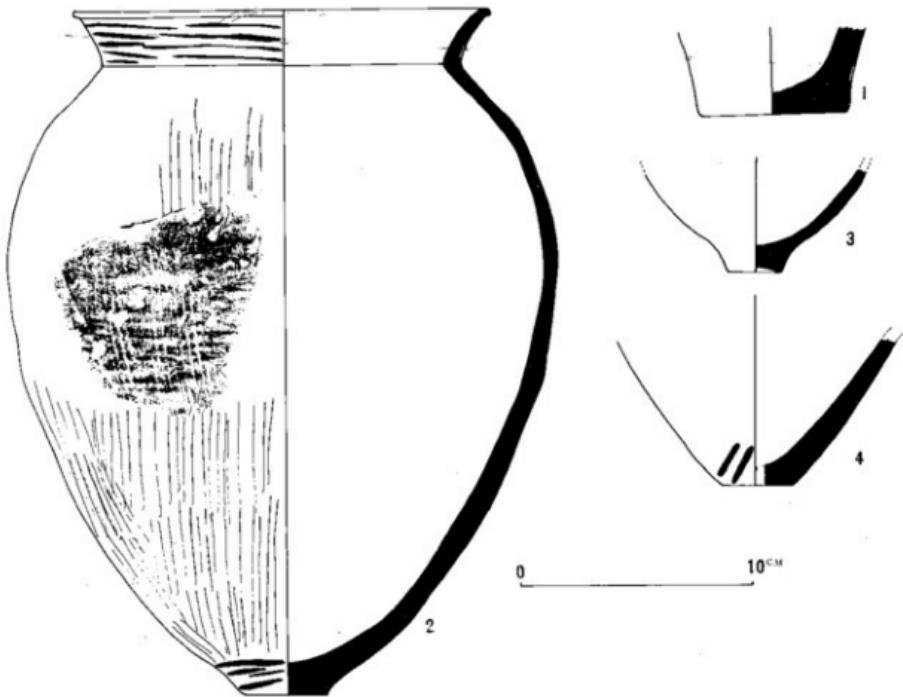


2

第5図 A地区弥生土器と敲石出土状況

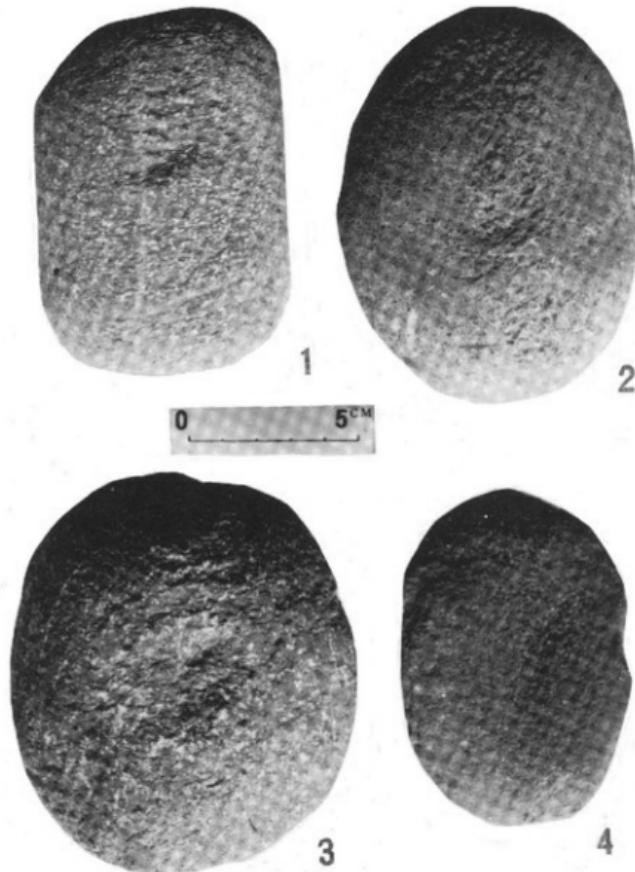
この根石群とだいたい同一層位ないしは、やや掘り下げたところから第5図1にみるように弥生土器が発見された。弥生土器はほぼ復原されて完形として図示しているが、弥生後期（三世紀代）のものである。またそれに伴う敲石（第5図の2）も数個発掘された。

なおこの発掘で雲母粒子片の非常に多く入った厚手の無文土器も発見されたが、これは縄文早期の大形楕円押型文土器（高山寺式土器）に伴う土器で、8000年前のものである。



第6図 A地区出土の弥生土器

第6図はA地区より発見された後期弥生土器である。2の變形土器は、第2図のNo.12とNo.13の地点より出土している。1はヒビノキI式土器（弥生後期中葉）の底部、2～4は後期終末のヒビノキII式土器である。3は壺形土器の底部、4は米を蒸す甑形底部で、底部中央に小さな一孔がある。これらの土器の出土から、長徳寺址は弥生後期人にとっても住み易い土地であったとみられる。ヒビノキI式・II式はともに三世紀代の土器である。



第7図 長徳寺A発掘区出土敲石

長徳寺A地区発掘区より出土した敲石は4個である。網雲母片岩や砂岩で作っている。ヒビノキII式土器に伴うものとみてよからう。1は出土地点No.5より出土し、2は出土地点No.6より出土している。3はNo.10の出土地点、4はNo.8の出土地点より出土したものである。(2図参照)

中央に凹んだ打痕があり、周辺部も敲打のあとが残っている。A地区から発見された敲石は、ここに図示した4個だけである。



1



2

第8図 長徳寺A地区出土歴史時代  
土器・陶器

1の写真は長徳寺A地区出土の須恵器三片と瓦器二片である。須恵器は平安時代後期の破片で（No.3・No.7・No.10の3地点より出土）あり、この出土によって長徳寺建立の年代が平安後期であることをうらざけるものとしてよいであろう。また瓦器の破片も出土し（No.1・No.3の地点）、これらの瓦器は鎌倉時代のものである。また図示していないが南北朝時代の羽釜も（No.2・No.4の地点）出土している。

さらにA地区よりはこのほかに、土質質土器も出土（No.1・No.3・No.4）している。もちろんこれらは杯が多く、底部は平底で糸切であって室町時代のものである。（2の写真）

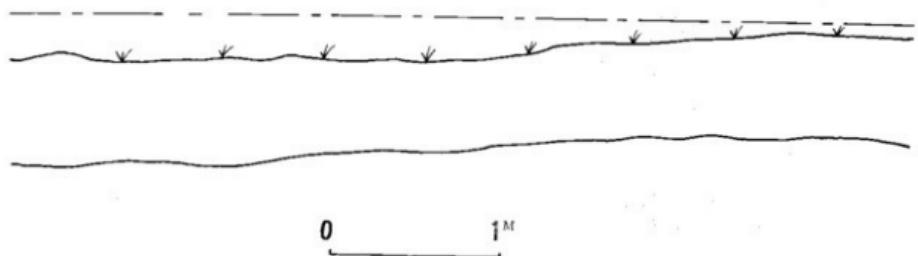
以上のA地区的出土遺物をみると、平安時代後期から鎌倉時代そして南北朝時代、さらに室町時代と各時代にまたがっているが、これが火災のためにあろうかすべてが細片になって出土している。むしろ同地区から出土する後期弥生土器片の方が大きな破片や復元可能の状態で出土することは注意しよう。



第9図 B地区発掘風景

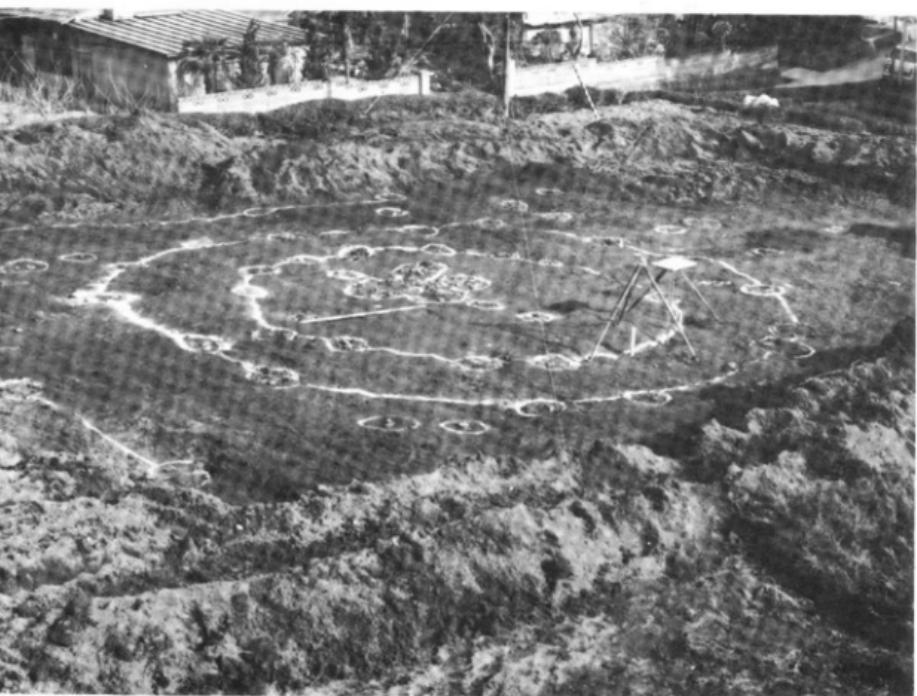
長徳寺の第二次発掘調査は昭和52年の3月4日～8日までの5日間にわたって、これを実施した。前田和男・岡本健児が発掘担当者となったのは、前回と同様であるが、とくに今回は発掘補助者として国学院大学学生井本葉子と立正大学学生岡本桂典が参加した。

今回の発掘は前回発掘したA地区の南に位置しB地区と呼び一畑一全面を発掘した。B地区的発掘は全面発掘を予定したので、 Yunpoを使用しての発掘であった。



第10図 長徳寺多宝塔付近地層図

長徳寺址B地区（多宝塔址発見地）の西北部の一点をとって、地層の断面図を作成した。地表面も南に向ってゆるく傾斜していることがわかると思う。第一層は黒色腐植土層で、この層自体も南に向って傾斜する。この層は表土層との分離はむつかしい。この層の厚さ50センチ前後である。第二層は赤褐色粘土層で地山である。この層の直上に多宝塔の礎石の根石は置かれている。また高山寺式土器や葛島式土器の如き縄文早期の押型文土器は、第二層直上から出土するが、後期弥生土器は第一層の下部より出土する。



第II図 B地区多宝塔礎石下根石の状況

B地区発掘の圧巻はなんと言っても、多宝塔礎石下の根石がわりあい動かない状況で出土し、それによって多宝塔下の礎石の状況を明確にし得たことである。写真では下層の方柱側柱の礎石根石群がごく一部みえるだけで、その内側の円形配置の円柱礎石の根石群が二重になっているのがよくみえる。真中にみえる根石群のかたまりは、内側の四天柱のものとみられるが、円形配置の円柱の中央でなく、すこし一方によったものである。



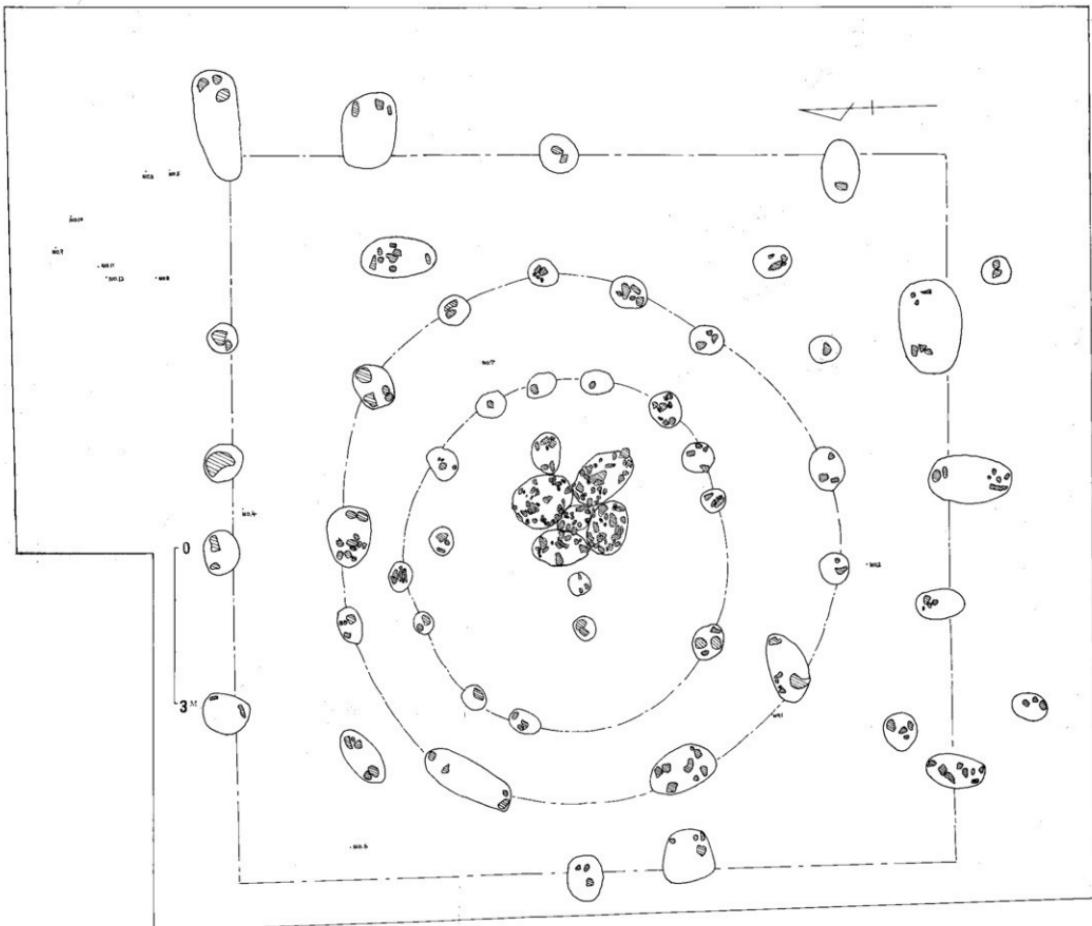
第12図 四天柱の根石群の一部

四天柱の一部の根石群を示した写真であるが、このような小さな礎を置いて根石にしたのは、この多宝塔礎石下の根石に共通してみられるものである。根石群のまわりにある白い線は、その輪郭を表すために発掘者が石灰をまいてつけたものである。このような根石群の発見によって、われわれ発掘調査団はこれを多宝塔址とみなしたのである。多宝塔址から出土した歴史時代の遺物は室町時代の土師質土器がすこしあつたにすぎない。

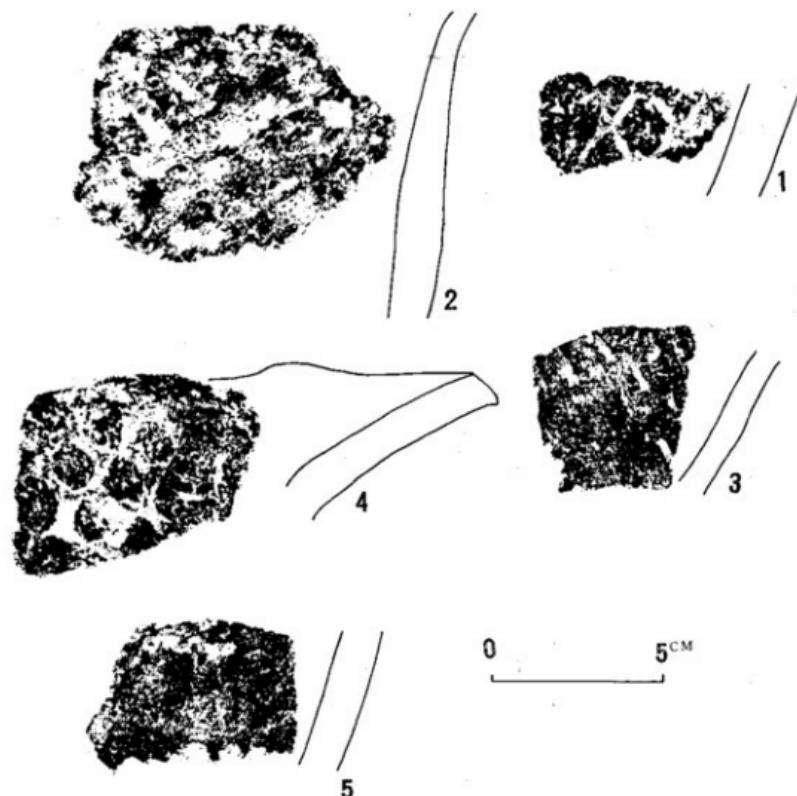
折込みの第13図は先に述べた多宝塔址礎石下の根石群を実測したものである。根石群の上の礎石は早くより抜き取られ、いろんな方面に利用されたが、この根石群はよく残ったものと考えなければならない。この根石群の配置により多宝塔の存在が明確になったのは、大きな収穫である。初層の総柱間は約14メートルがあるので、その大きさは現存の和歌山県岩出町の根来寺多宝塔よりやや小さいものである。

多宝塔周辺ないし多宝塔内の番号は、主として縄文時代早期の土器および石鍤、弥生時代後期の鉄石の出土地点を示したものである。

なお多宝塔周辺には、まったく古瓦片の一片もみなかつたことを申しそえておきたい。

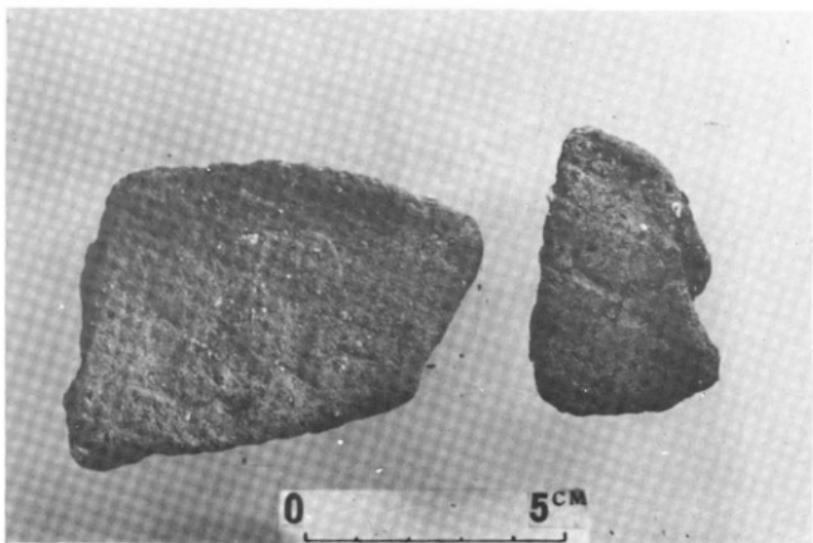


第13図 B地区発見多宝塔根石群の実測と縄文土器等出土地点



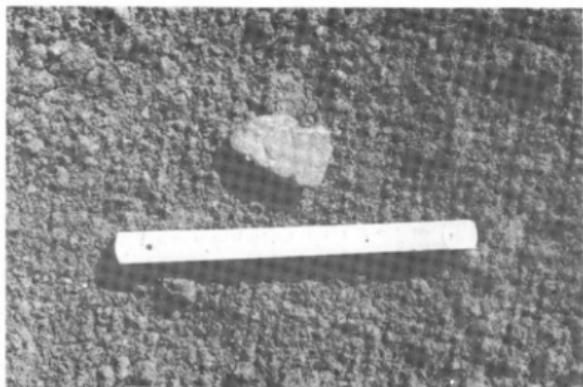
第14図 早期縄文土器実測図

長徳寺B区多宝塔址内出土の早期縄文土器片は、1～4である。2は多宝塔内No.1の出土で黒褐色、器表に指頭圧痕が多くみられ萬島式土器片である。同じNo.1の地點から発見された土器片は3であって、条痕のみられる土器片で褐色である。この土器片は萬島式土器の次に編年される高山寺式土器である。1・4の土器片は、No.8の地點から出土し4はその口縁部である。1・4の土器は同一器体のもので、器表に大形楕円押型文がみられる。この大形楕円押型文の土器も高山寺式土器である。5の土器片は灌頂堂址（A地区）の15の地點より出土したもので、厚手無文であり、胎土はものすごい程雲母の混入した黒褐色のものである。この土器片も高山寺式上器のなかに入るものである。この雲母の混入の多い高山寺式土器片は、佐川町西山不動カ岩屋洞穴遺跡からも発見されている。長徳寺址に約8000年前の縄文人も住んでいたというのは、この土器片等の出土で明確になった。



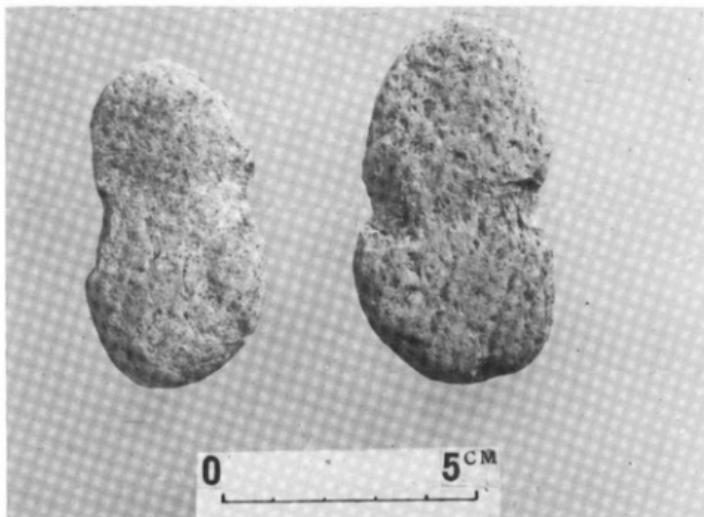
第15図 長徳寺B地区出土高山寺式土器

大形輪円押型文土器の出土は、高知県において最初の発見である。この押型文土器の発見によって、高知県の押型文土器は、不動ヶ岩屋II式土器→長徳寺式土器→城ノ台式土器と変遷することが判明した。なお本遺跡は先に述べたように萬島式土器が出土しているので、人が最初に住みついたのは不動ヶ岩屋II式土器の時期であることも判明した。長徳寺遺跡は早期繩文時代、後期弥生時代そして長徳寺址と三つの複合遺跡である。



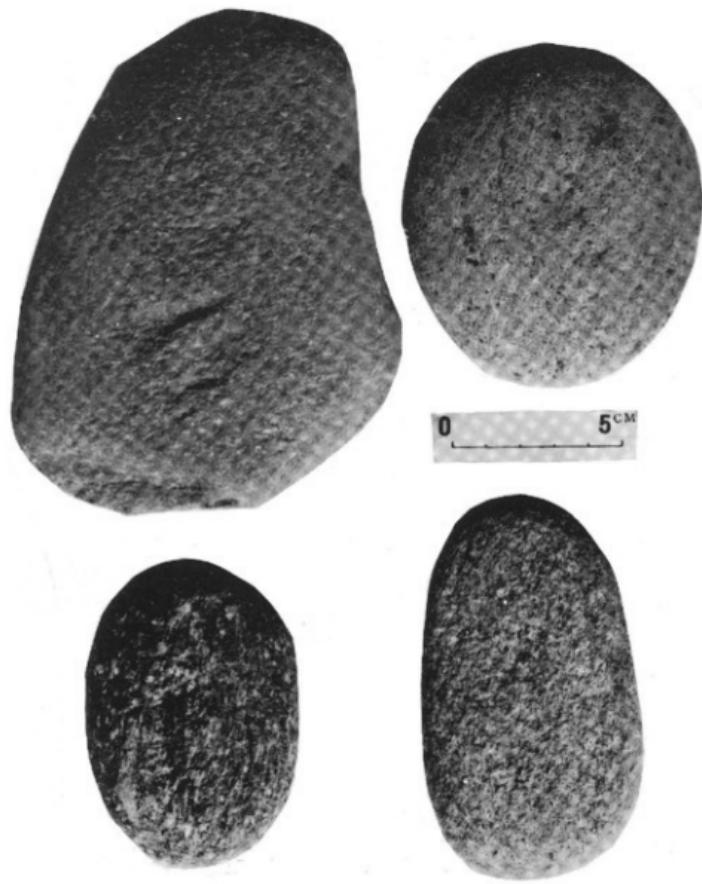
第16図 高山寺式土器片の出土状況

高山寺式土器一大形楕円押型文土器一片の出土状況を示す。B地区No.8の地点より出土した。発掘した当初歴史時代の羽釜の破片と思っていたが、器面をブラシで水洗したところ写真でみるような大形楕円押型文が出てきて発掘者一同はびっくりした。もともとこの発掘の発端は、『本山町史』編さんに伴うものであったので、一同はこの土器片の出土で『本山町史』もその書き出しは8000年前に遡ったと大いに喜んだことである。



第17図 長徳寺B地区出土の石錘

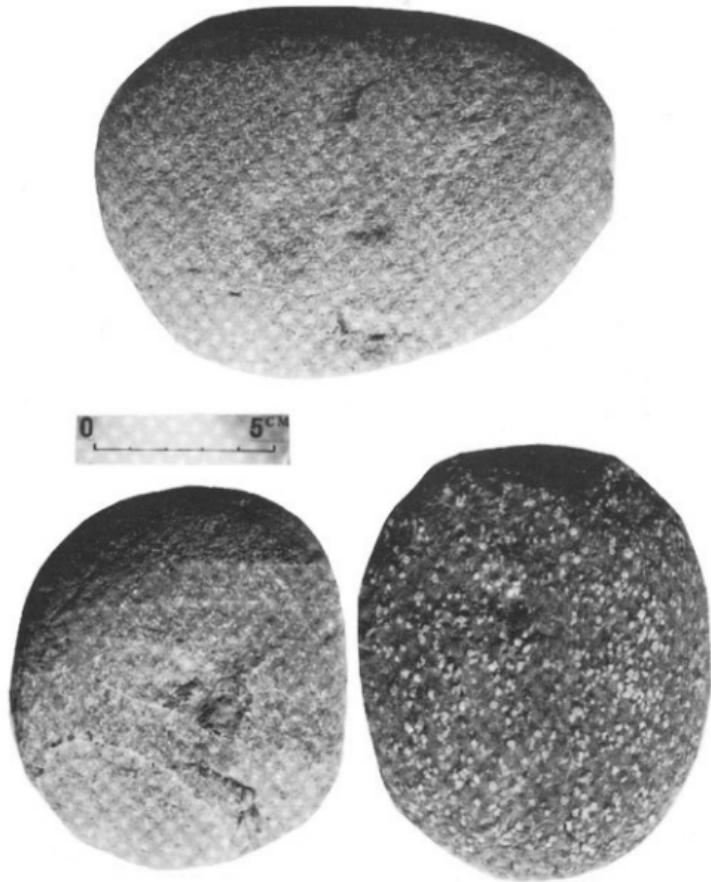
緑色片岩の自然礫の長い方の両端中央を簡単に打欠いだ石錘である。小さい方はNo.9の地点より出土し、大きい方はNo.7の地点から出土している。このように長い方の両端を打欠いだ石錘は、和歌山県高山寺貝塚からも発見されているのでこれも縄文早期の高山寺式土器に伴うものであることは明確である。この石錘の出土で、土佐の網漁業が縄文早期までさかのほる事があきらかになった。もちろんこれにつけられる網は建て網であろう。ただ縄文後期の建て網の石錘は、横に長くその両端を打欠いでいるが、これは先述するように縦に長く、その長い真中を打欠いでいる。このような石錘の形の違いは、建て網の大小に關係するのではないかと筆者は考えている。遺跡の南を流れる吉野川や汗見川で魚をとったものと思われる。小さい方の石錘の重量は40グラム、大きい方の重量は58グラムで縄文後期の石錘の重量とは大差がない。



第18図 長徳寺B発掘区出土の敲石 I

長徳寺B地区より出土した敲石は、大小いろいろあって大は $14.5 \times 10.4$ センチのものから、小は $9.3 \times 6$ センチのものまである。第18図の敲石の右上はNo11の地点より出土し砂岩製である。他の三個は絹雲母片岩で作った敲石である。

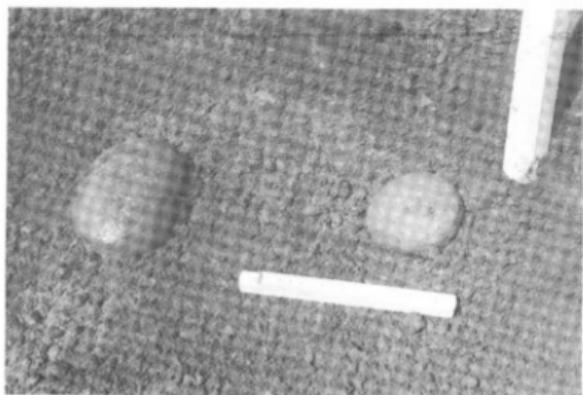
B地区よりは次の第19図の敲石とあわせて7個出土しているが、すべて弥生後期末のヒビノキII式土器に伴出したものとみて誤りなかろう。



第19図 長徳寺B発掘区出土の敲石2

第19図に図示した敲石もすべて紺雲片岩製の敲石である。上段の敲石はNo.12の地点より出土、下段左はNo.5の地点より出土（第13図参照）したものである。

このように多量の敲石がヒビノキII式土器に出土するのは、遺跡の立地とも関連して畑作一粉糀化を考えてよくはなかろうか。このような台地性遺跡では米作一本にしばることは無理なことで畑作にたよることが、弥生後期には多かったと思われる。



第20図 B地区敲石出土状況

第18図右上の敲石と第19図上段の敲石の出土状況である。B地区No11とNo12の地点からの出土である。敲石は地山の粘土層よりやや上位の黒色土層から出土し、層位的に押型文土器の出土する層位より上部から出土する。弥生土器の発見数よりも多く敲石が発見されている。写真をみるとよくわかるが、出土した敲石の上面にそれぞれ敲打痕が残っている。



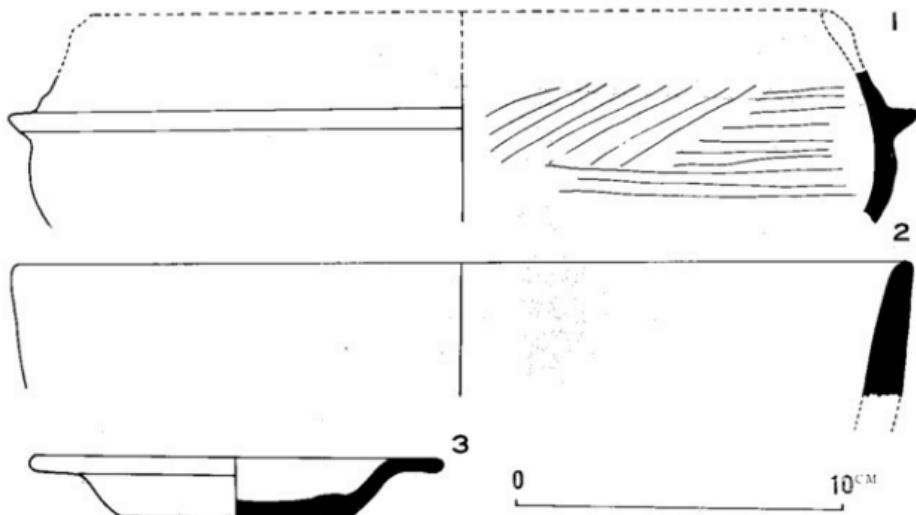
第21図 C 地区の発掘と礎石

C地区の位置については、第26図をみていただきたい。若一王子宮の西方、保育園の南に位置する。ここに礎石が二個露出するものがあったので発掘したが、第21図にみる如く下に根石のない礎石であって、明治以後に小さな小屋の礎石に使ったことが古老の話で判明した。しかしこの場所を発掘していると、その明治以降の小屋と違う根石も発見され、中世の羽釜などが出土し、この地区に僧房のあったことを確認させた。



第22図 C 地区の根石

明治以降にどこからか運んできた礎石の置いてある層を掘り下げるに、古い礎石の根石が2～3発見された。大半の根石群は破壊されていたが2～3の根石群を発見することのできたのは大成功であった。ここからは次に説明する羽釜や土師質土器や火消壺のような日常什器のみが出土するところをみると、この場所は僧房のあったところとみてよいであろう。このような僧房は、ここ一個所でなく数個所あったとみられる。



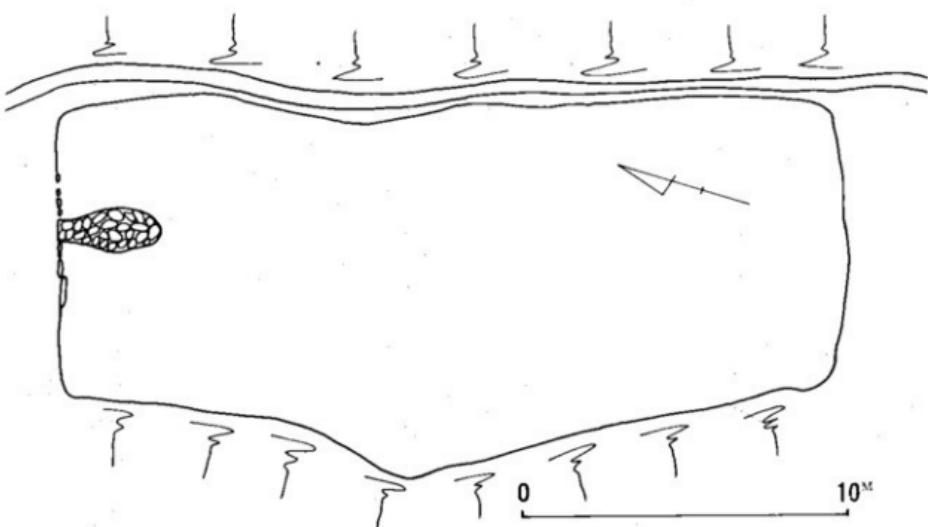
第23図 長徳寺C地区（僧房）出土の日常容器

長徳寺発掘C区（僧房）より出土した日常用器三点である。1は瓦器質の羽釜、貼布した鈎の下は煤が一面に付着している。2は土師質土器で表面は媒けている。本来は堅緻な土器で、中世の火清壺と考えられる。3は1と同様に瓦質土器で外面は黒灰色、内面は灰黒色で、一個所口縁に向って媒けているところをみると、この杯状土器は灯明皿としての使用が考えられる。三点とも中世期のもので、僧房の日常器具類である。



24図 若一王子拝殿付近出土の土師質土器

長徳寺の鎮守であった若一王子宮は、今もこの地方の大きな大社として残っている。この若一王子宮の拝殿下と付近には、室町時代の土師質土器の破片が一面に割れて散布している。そのほとんどは素焼で、底部は平底・糸切底である。器形もほとんど一定して、大小はあるが杯でしめられている。これらの土師質土器は神社の場合であると、祭器や灯明皿として用い、祭祀終了後は神社のうらなどに放棄したと思われるものである。かかる点からみて現在の若一王子宮の拝殿の位置は、室町時代の拝殿・神殿の位置よりもずっと奥に入ってきてないかと考えられるふしがある。いずれにしても、このような室町時代の土師質土器が現神社拝殿下から出土することは、当該神社は古いものであって長徳寺とともにその成立の歴史を同じくするものであろう。なお神社境内地は発掘しなかったが、これを考古学的調査を行うと興味つきない遺構・遺物が出土すると思われる。



第25図 長徳寺奥の院実測図

遺跡の北の山中に実測図に示すが如き奥の院がある。南北23.5メートル、東西10メートルの平坦地であり、現在は桧林になっている。北部の側面中央に積石がみられるが、修驗関係の積石であろうか。発掘をすれば、そういう点の解明になるであろう。発掘地区を南に下ったところに大門という字名が残り、そしてこの奥の院の存在、そして鎮守である若一王子宮の存在等、これらからみて長徳寺は真言系の伽藍配置であったとみられる。



第26図 長徳寺址周辺地

折込みの第26図は長徳寺址周辺の平板測量図である。発掘したA地区・B地区・C地区的位置がこれによってよくわかるであろう。大門という地名のついたところは宅地の密集している付近で、この付近に長徳寺の大門があったことを物語る。そして発掘したA地区からは横に長い細い建物が建っていたと思われるところから、これを灌頂堂としてよからう。さらにB地区を発掘したところ、これははっきりと多宝塔とみられるものが発見された。灌頂堂のある位置の標高は292メートルであり、多宝塔のあった場所の標高は281メートルである。そして灌頂堂・多宝塔の位置がはっきりすると、当然その位置から推定して、灌頂堂の西方に護摩堂があつたはずであるが、これは第26図をみていただくとわかるようにすでに人家が建ってこわされている。さらに多宝塔の西隣の現在の畑には当然金堂があつたであろうが、これも実はかって水田化したためその大半は破壊されていると思う。

僧房（坊）は発掘によってC地区より発見されたが、まだ5～6個所の坊はあってしかるべきと思われる。今後本寺院址を地元で研究していただきたいことは、まだ発見されてない坊と中門さらに鐘楼・経樓を追求していただきたいことである。そして鎮守である若一王子宮があり、これも先述した奥の院がある。これらすべてでいわゆる長徳寺を形成していたのであるが、この伽藍配置から長徳寺は真言宗系の山岳寺院の形態をとっていたといふことがいえよう。

# 付 錄 1

## 上奈路・嶺北高校校庭出土の遺物群

岡本健児・前田和男  
岡本桂典・井本葉子

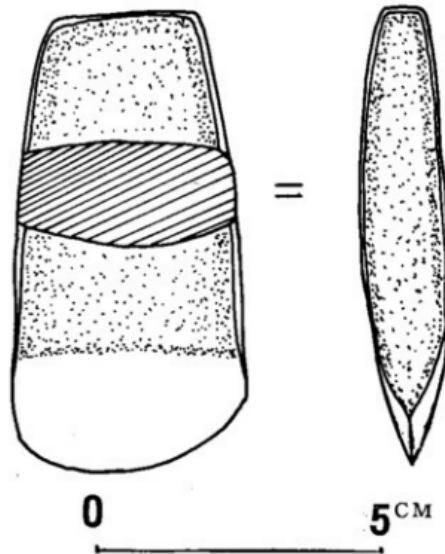
木山町の代表的な弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡は、高知県立嶺北高等学校遺跡である。これは嶺北高校校庭造成によって発見された遺跡であるが、出土遺物から推定して集落址関係遺跡とみることができる。前田和男が嶺北高校在任中に主として蒐集した遺物についてここに解説をこころみた。上奈路遺跡は縄文時代の磨製石斧の単独出土地で、今後の検討を必要とする遺跡である。



第27図 上奈路遺跡(×印)と嶺北高校校庭遺跡(●印)

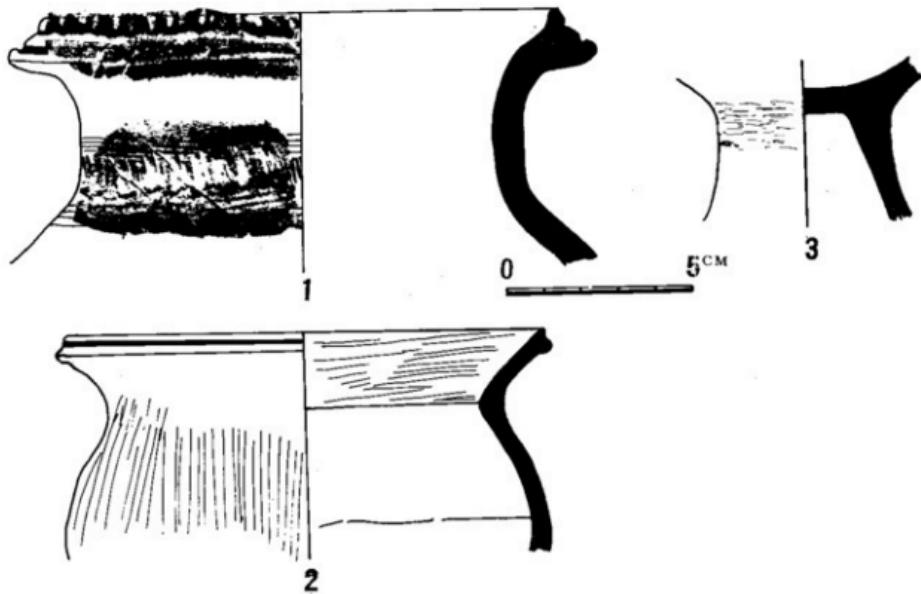
# 本山町上奈路縄文磨製石斧

本山町上奈路で単独に発見された蛇紋岩製の定角式磨製石斧である。全面研磨され、両側面も研磨される。刃部は丸刃に近く、両面研ぎ出しの蛤刃である。鏡はみとめられない。これに似た石斧は、縄文晩期の土佐町田井八反坪遺跡より出土し、さらに高岡郡中土佐町押岡からも出土している。土佐郡土佐町八反坪遺跡の例から、この石斧は縄文時代晩期のものとみられる。



第28図 本山町上奈路出土の縄文時代磨製石斧

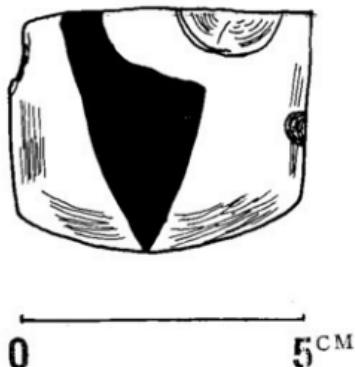
## 嶺北高校校庭出土の遺物群



第29図 嶺北高校出土の寺門式土器・龍河洞式土器

本山町嶺北高等学校からは、弥生時代中期末から歴史時代にかけての土器が出土している。

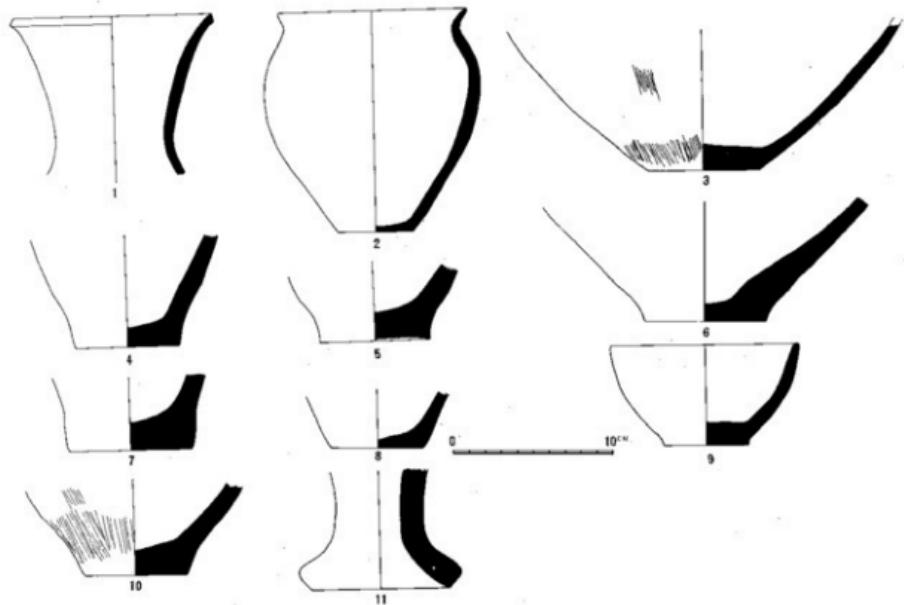
第29図の1は弥生後期初頭の寺門式土器の壺形土器である。四線文が沈線に変わったところに龍河洞式土器よりも新しさがみられる。2・3は弥生中期末の龍河洞式土器の變形土器と高杯形土器である。本山町を中心とする嶺北の山間の平野部では、この龍河洞式土器の時期（2世紀代）から低湿地で稻作を開始したと考えられる。



第30図 嶺北高校校庭出土の大形蛤刃石斧

嶺北高等学校の校庭からは、太形蛤刃石斧の刃部だけが折れて発掘されている。この太形蛤刃石斧は、先に述べた龍河洞式土器に伴うもので、木を伐り倒すに使用されたものと考えられる。

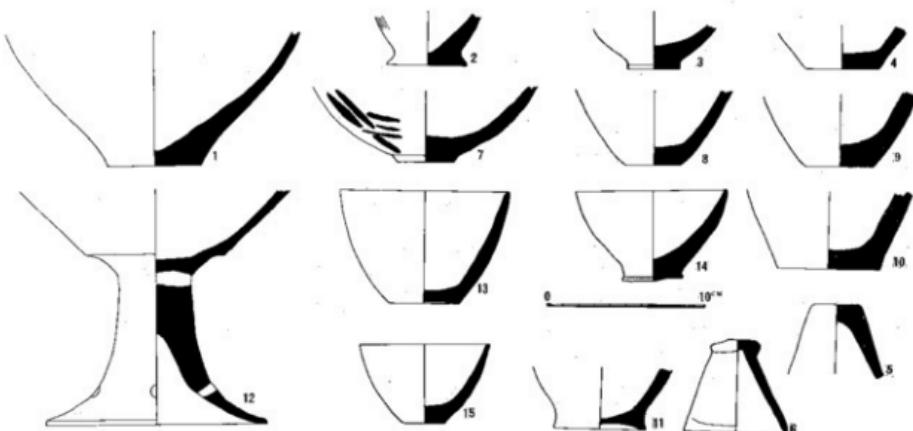
刃部だけしか残っていないが、全部残っていれば10センチ大の石斧となる。嶺北高等学校の運動場造りで、偶然に発見されたものであるが、今日のように本格的に当時発掘していれば堅穴住居も発見されたであろう。



第31図 嶺北高校校庭出土のヒビノキI式土器

嶺北高校校庭出土の弥生後期中葉のヒビノキI式土器群である。三世紀中葉と考えてよからう。

1は壺形の口縁から頸部にかけてのもの、2は菱形土器、3～8・10は底部、9は楕円形土器、11は器台でこの上に土器をのせるものである。龍河洞式土器の時期以降、校庭遺跡では弥生人が住みつき、水稻耕作を発展させヒビノキIII式土器の時期まで住みついている。とくにそのなかで、人口が増加したのはこのヒビノキIと次のヒビノキII式の時期である。



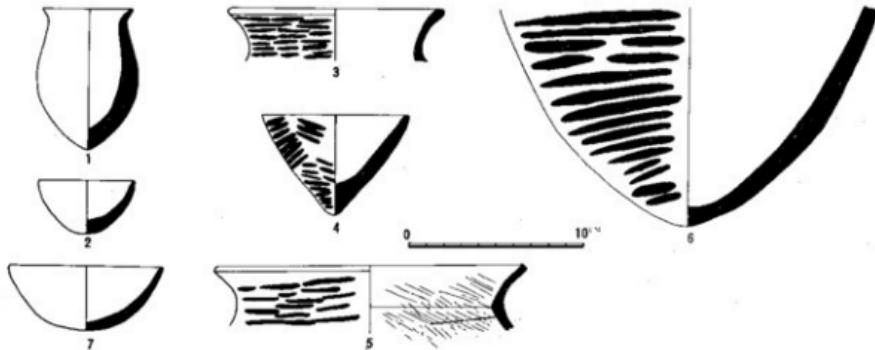
第32図 嶺北高校校庭出土のヒビノキII式土器

嶺北高校校庭からは、数多くの弥生終末の土器ヒビノキII式土器が出土している。底部が小さく、裏には敲目痕（7）がみられるのが一つの特色である。12は食物を盛る高杯、13～15は楕円形土器である。楕円形土器も数が多いのは弥生後期の特色である。5～6は土製支脚で、これを三本ならべてこの上に楕円形土器を置き、下から火を焼き煮沸するのである。嶺北高校校庭遺跡では、この時期に最も多くの弥生人が住んだとみてよかろう。



第33図 横北高校校庭出土の砥石

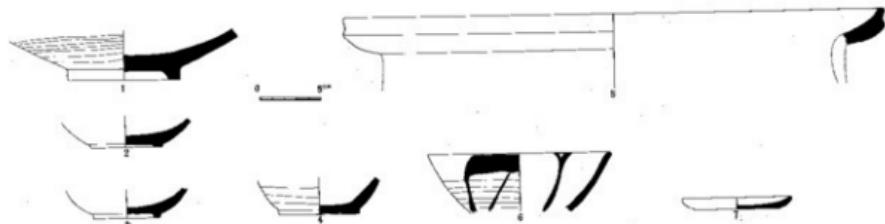
横北高等学校校庭遺跡からは、一つの砥石が出土している。石質は粘板岩で、上面と側面を  
砥いだ痕跡がある。香美郡土佐山田町ヒビノキ遺跡発掘の経験から、弥生後期中葉から末にかけてのヒビノキI式土器ないしヒビノキII式土器に伴う砥石とみてよかろう。この時期になると、敲石以外の石器がほとんど姿を消し鐵器が普及する時代である。この砥石は、その砥いだ面からみて鐵器を砥いだとみてよいだろう。



第34図 嶺北高校校庭出土のヒビノキ田式土器

ヒビノキ田式土器は、土器の底部が丸くなり、またとがったものも出現する。土器の表面には敲目痕がつけられる。(3～6) 3・5・6は變形土器、1・4は小形鉢形土器、7は楕形土器、2は小形粗製土器で祭祀に使ったものと思われる。このヒビノキ田式土器は古墳時代初頭の土師器で、三世紀後半～四世紀初頭の土器とみられる。不思議なことには、この時期を限って、嶺北高校校庭遺跡には古代人は住まなくなる。どこに移動したのであろうか。

なおここに図示していないが、このヒビノキ田式土器に伴う糸を紡ぐための道具である紡錘車（土製でそろばん玉状をなす）も出土している。



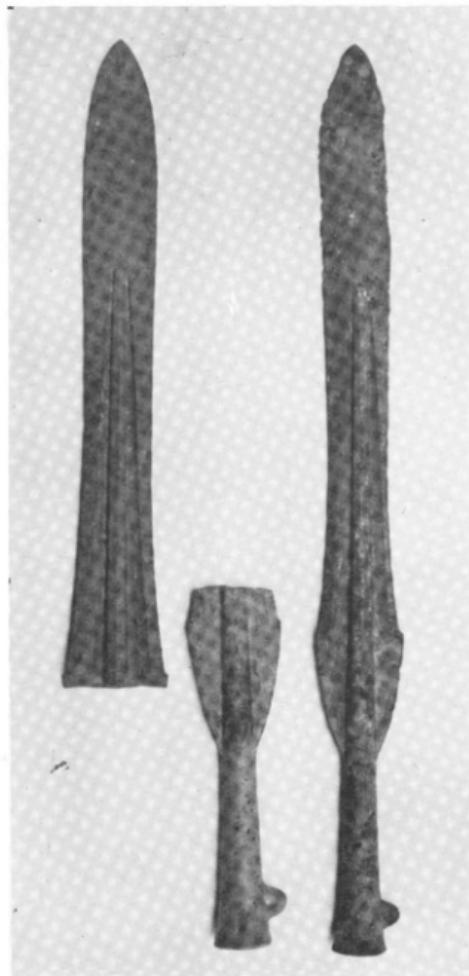
第35図 嶺北高校校庭出土中世陶器・土器群

嶺北高校遺跡からは、中世それも鎌倉時代から室町時代にかけての陶器・土器類も発見されている。2～3は高台のある土師質土器の杯(つき)、4は底部に糸切目のある杯、そして7も底部に糸切のある灯明皿である。6は火拂のある土師質土器で椀である。5は大きな素焼の羽釜である。1は一見古瀬戸と見誤る如き釉のついた鉢の残片であるが、このような釉のある室町時代の焼物については、その窯を四国のどこかで求めなければならないと思われる。5は南北朝時代、2～3・6は鎌倉時代、4・7は室町時代である。これらの陶器・土器は、いわば雑器であって庶民の什器である。嶺北高校の校庭では、古い弥生人から古墳時代の人が住みついたが、これらの中世の庶民も住みついたということはこれらの出土遺物で知ることができる。

## 付 錄 2

### 嶺北地方発見の銅矛

岡本健児



第1図 山ノ神神社所蔵の銅矛

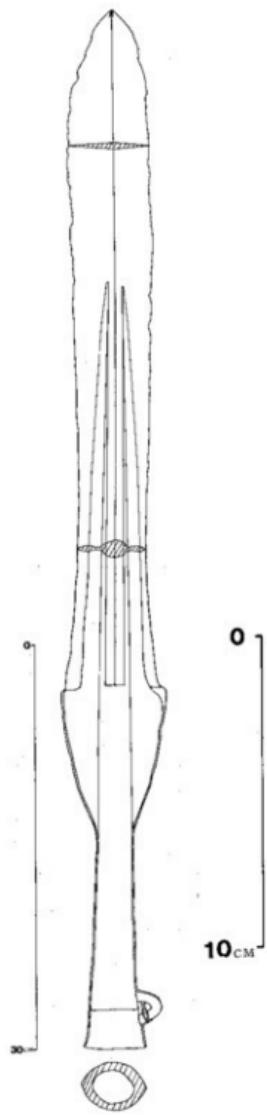
1. 嶺北地方は高知県北部吉野川流域の地域をさす。この地方の銅矛について土佐郡大川村高野<sup>77</sup>在住の和田隆明氏の努力によって新たに知見する銅矛を調査することができたので、ここに紹介し今後の問題提起としたい。

まず土佐郡土佐町駒野山ノ神神社の宝物である3本の銅矛を調査した。これには氏子である中尾在住の上田岩男氏の世話をとった。記して謝意を表したい。

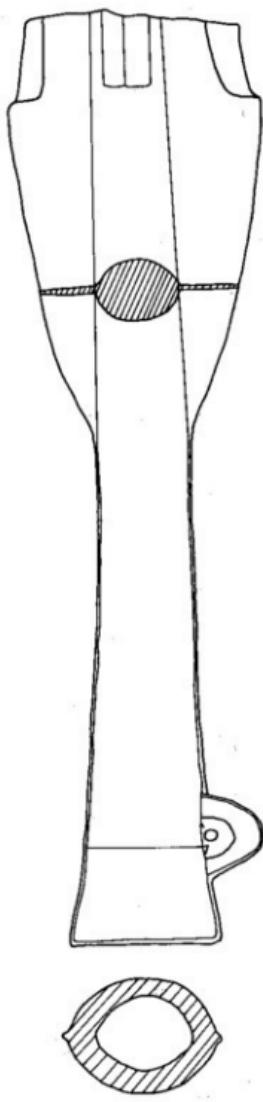
駒野の山ノ神神社は吉野川の上流森川の左岸の丘陵上にある小祠で、ここに紹介する3本の銅矛を所蔵する。まずこの3本の銅矛について詳述し、その後この3本の銅矛について問題提起をしたい。

その1の銅矛(第1図・第2図)

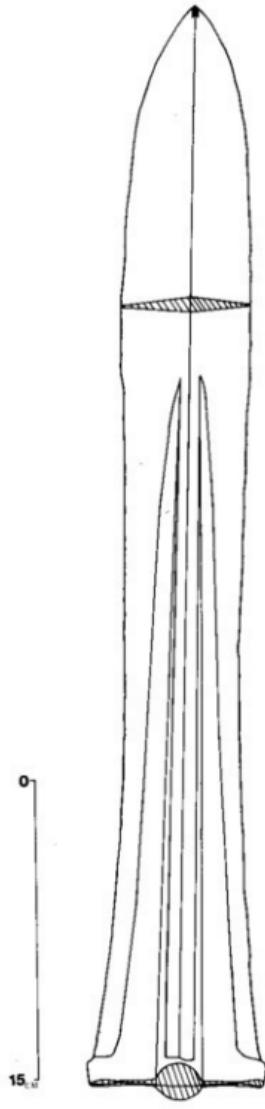
この銅矛は刃こぼれがみられるが、ほぼ完形の銅矛である。銅矛の耳と袋部根元の節帯との位置関係は、耳の中央よりやや下がったところに耳と節帯とが対応している。耳には一孔を持たない。このような耳や耳と節帯の関係から、この銅矛は近藤喬一氏のいう中広形銅矛第II式に分類される。ただ



第2図 山ノ神神社所蔵の銅矛その1実測図



第3図 山ノ神神社所蔵の銅矛その2



第4図 山ノ神神社所蔵の銅矛その3実測図

節帯下の有段部の高さが余り高くないことは、中広形銅矛II式でも古いものに属する。この銅矛に非常に似たものとして、香川県高松市郷東町下山出土のものを挙げることができる。この銅矛の現存の長さ78.5cmであり、最大幅は鋒先より17.3cmさがった部分があり、幅数6.2cmである。現在重量1.365kgである。背の鎬は研ぎ出してつけたものである。縁錆が全面にみられるが、ところどころに漆黒色をなす部分もある。刃部の刃こぼれはひどく、とくに耳のついた面の刃こぼれがひどい。このことは銅矛が埋納されていた状態と関係が深いとみられる。

この銅矛に関連して、1つの問題提起をしたい。中広形銅矛II式でも本銅矛のようにI式にやや近いものは、次のような製作上の一つの約束があるのでなかろうか。從来四国に残存しているものに当っての結果でより多くの銅矛には今後追跡調査を試みたい。

その一つは銅矛の全長の12分の1が銅矛鋒部の最大幅を示すこと。本銅矛で具体例を示すと全長78.5cm、そしてその12分の1は6.5cm強である。ところがこの銅矛は刃こぼれのため3mm程度最大幅が本来のものよりすくなくなっているとみるものである。

いま一つは銅矛の間のつけ根の位置は、銅矛の末端よりして銅矛の全長の5分の1の長さのところにあるということである。本銅矛の全長78.5cmの5分の1すなはち15.7cmは間のつけ根から銅矛袋部の末端までの長さである。

このような数値を出す作業は、良好な状態で出土した銅矛でないと困難で地方在住の研究者にはむつかしい仕事であるが、一つの問題提起として書かせていただいた。

#### その2の銅矛（第1図・第3図）

穂部の下部から折損しているが、折損というより切断具で切った感じであり、近世末ないし近代のはじめにおける鑄掛屋による行為とみたい。背の鎬は研ぎ出したもので、袋部の根元は1段の節帯をつけている。耳には一孔がある。耳と袋部根元の節帯との位置関係は耳の中央よりやや下で、それが節帯と対応している。この耳と節帯の位置関係から、この銅矛は中広形銅矛のII式に属する。縁錆が全面にみられ美しい。刃部の部分はわずかしか残っていないが、刃こぼれがみられ耳のある方の刃こぼれがひどい。現存全長30cmである。袋部の末から間部のつけ根まで15.8cmであるので、その5倍をして本銅矛の推定全長79cm前後であろうか。

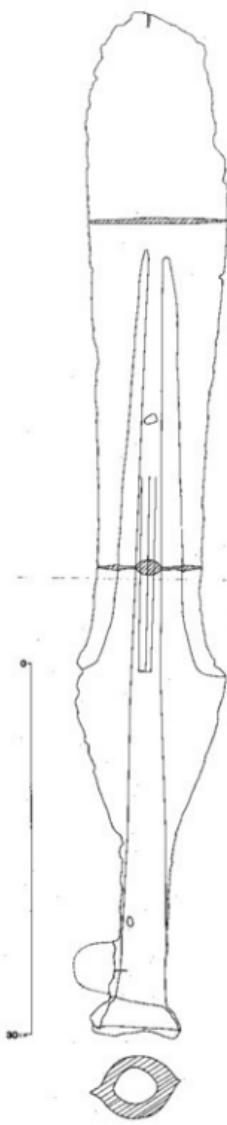
#### その3の銅矛（第1図・第4図）

中広形銅矛のII式である。背の鎬の研ぎ出しは非常に明確である。縁錆が全面にみられるが、銅質は3本のうち最良である。刃部の刃こぼれが両刃にこまかくみられる。間上部から銅矛の袋部にかけて欠損している。これもその2の銅矛と同じように鑄掛けのために切断されたものとみられる。残存銅矛全長54cmであり、矛最大幅6.6cmである。この最大幅から指定したこの銅矛の推定全長は79.2cm前後であろう。

山ノ神社のある付近の駒野の地形をみると、銅矛の出土があってもしかるべきところである。このような考えからして、これら3本の銅矛は駒野ないしその近くから出土したものであろう。これらの3本の銅矛は先述したように中広形銅矛II式であって、祭器として弥生人に使



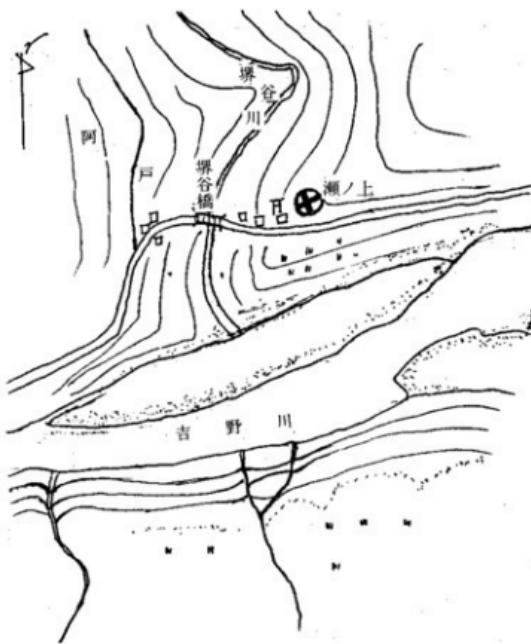
第6図 北山瀬ノ上銅矛拓本図



第8図 抽ノ木妙見社の銅矛

われたものであるが、これら銅矛の移入経路については高知平野よりもたらされたもので、豊山峠を越え地蔵寺川をくだってもたらされたものでなかろうか。

2. 嵐北地方で確実に出土地点を判明している銅矛埋納地は、本山町北山瀬ノ上である。吉野川とその一支流堺谷川の合流点をのぞむ位置に出土地点があり、その出土地点の在り方は高知県高岡郡窪川町七里西ノ川口遺跡とまったく同一である。(第5図)



第5図 北山瀬ノ上銅矛出土地（×印）

この銅矛は大正6年9月10日山腹が崩壊し、その場所に露出しているのを発見している。現在東京国立博物館の所有になっている。全長84cmで緑鏽が全面をおおっている。山腹の崩壊によって発見されたため、そのいたみがはげしく耳も、耳と同じ側の関部も欠損している。欠損した耳や関部は、埋納地に残っているのであろうか。穂部もいたみがはげしく両刃はものすごく刃こぼれをしている。背に鎧の痕が残っているし、欠損した耳の中央部に節帯が磨滅してかすかに残っている。すべてのこの銅矛の持つ特色から、中広形銅矛のII式である(第6図)が、

同じII式でも先に述べた駒野山ノ神社のものにくらべると時期のさがるものであることには間違いない。このようなII式でも非常に大形になり、広形銅矛に近づいたものをII'式とでも呼ぶなれば、高知県土佐市波介万福寺出土の一本はこれと同じ型のものである。

出土地点から考慮して、この中広形銅矛は河の水靈の依代であったのでなかろうか。いわば筆者は銅矛は水靈に対する呪的儀礼のためのものであると考えている。本北山瀬ノ上遺跡は、それを物語る重要なものである。



第7図 柚ノ木妙見社の銅矛

3. ここに紹介する銅矛はやはり和田隆明氏の発見によるもの、そして柚ノ木山中計義氏の世話によって詳しく調査することができた。銅矛は土佐町柚ノ木の妙見社（星神社）の宝物で1本所蔵している。明治15年ごろ妙見社の石ぐろの上に置いてあるのを発見したという。このことから、そのころ出土し神社に関係あるものとして何者かによって妙見社の石ぐろの上に置かれたものであろう。また以上のことから考えて、出土した地点は一応妙見社に近い吉野川右岸であったとみてよいだろう。

銅矛は広形銅矛のI式で現存の長さ82.8cm、最大幅は闘部で12.1cm、穂部の最大幅は11.7cmである。緑銹全面にかかりて美しい色調をなすが、銅矛全面にわたりて素があり、とくに穂部の素はものすごい程あって、いわばこれが逆に美的なものにみえる。（第7図）耳は折損してその全様は明確でないが、広形銅矛の扁平な耳の一部がその耳の基部に残っているが文様は明確でない。この広形銅矛は片面にのみ耳の中央に刻線が1.5cmの長さでみられ、片面にはこの刻線がない。鉢部は欠損し穂部の錐はみられない。ただ背の研ぎ出しが闘部に近い穂部にみられるのは注目してよからう。背の研ぎ出し下端の刻線は見当らないが、袋部の刻線のあるところから広形銅矛I式とすべきであろう。（第8図）さらにとくにこの銅矛で注目すべきことは、袋部の底部の湯口が非常に明確にみられること、また袋部の下端から

2.3cmのところに鉛掛けのあることである。(第9図)



第9図 柚ノ木妙見社の銅矛袋部

この銅矛も耳のある方を上にして埋っていたのであろうか、そして耳部に鍼でもあて飛ばしたのであろう。さらに土中からこの銅矛を引き抜くような形で取り出したとみられ、その際土圧の関係で背がかすかに彎曲している。

この銅矛も確実な出土地点がわからないが、出土が吉野川流域の土地からということでたぶんそこに河の水靈に対する信仰から弥生人によって埋納されたのであろう。

4. 高知県嶺北地方は從来銅矛出土例は本山町北山瀬ノ上出土の中広形銅矛II式の1本だけであったが、今回の一応伝世品とみられる4本の発見によって本地方の銅矛数は5本となった。それも中広形銅矛II式だけでなくそれにつづく広形銅矛I式のものも発見される

にいたった。本地方にはこれらの銅矛のほかに銅鐸1個（土佐町土居・突線鉢2式）も発見され、青銅器発見の数量は多い。この青銅器発見数に加えて、弥生遺跡発見数は余り多くないが、これは今後の吉野川流域の水田地帯の精査によってその数を増加するであろう。

現在嶺北地区の弥生遺跡で最も古い型式を出す遺跡は、本山町嶺北高校校庭であって龍河洞式土器（畿内第IV様式併行）が出土しているが、これなど中広形銅矛II式を祭器とした時期の土器であろうか。そして同じ校庭遺跡から寺門式土器（畿内第V様式初頭）の土器は、袖ノ木発見の広形銅矛I式の時期の土器であろうか、今後の検討がまたれる点である。

最後に嶺北地方の銅矛に関連して紹介したいのは、

愛媛県宇摩郡新宮村鳩岡に広形銅矛の總部先端部が折れて発見されている。これは神社にあつたもので、後世の持ち込みも考えられるが、その地理的位置からしてあるいは鳩岡付近で発掘されたとしてもおかしくないものである。ただその場合愛媛県東部にはまったく広形銅矛の分布しない地域であるので、いわば弥生時代にこの嶺北地方から河を伝い、岬を越えて運んだ可能性も充分にあることを申しそえて本稿をおきたい。なお本稿のもととなる調査および実測図の作成には、立正大学学生岡本桂典の援助があったことを記しておく。